

日本惑星科学会の社会的責務に関する一考察

渡部 潤一¹

1. はじめに

一昨年に明らかになった(財)東北旧石器文化研究所の藤村新一氏による石器ねつ造事件を、皆さんもまだ覚えておられるだろう。事件解明が進むにつれ、その影響は考古学にとどまらず、各方面に大きな波紋を広げている。彼の関わった186の遺跡のすべてについて、考古学協会特別委員会での検証は、すべて学術的価値なしと判断を下すという。大きなロマンを誘い、また藤村氏のようなアマチュア研究者が活躍できる学術分野であるだけに残念至極という印象を持った方も本会員の中には多いと思う。

ねつ造そのものこそ言語道断だが、この事件を契機に社会が問うているのは、ねつ造を長年にわたって許し、黙認してきた学会である考古学協会の姿勢である。どうして、その発見に疑義を持ちつつ、検証・議論をせずに放ってきたのか、と。実は、先日、筆者の元へかかってきた電話を受けたとき、現在の日本惑星科学会でも、残念ながら同種のことが起こっているといわざるを得ないことを再認識させられた。本論文は、後に述べる具体的事例に直面したことを契機に、日本惑星科学会も社会的責任を積極的に果たしていない一面があるのではないかと考えた末に書き上げたものである。また、本論文は、学会員全員の問題として心すべきであることを訴えることが本意であり、具体的事例に関わる先生方を名指しで批判する目的があるのではないことをあらかじめ付け加えておく。

2. 旧石器ねつ造事件からの教訓

筆者は、日本惑星科学会会員の中でも、天文学的手法を用いたアプローチをとっている研究者である。彗星など太陽系内の小天体を対象としてきたため、天文学の中でも彗星の発見者などのアマチュアとのつきあいが長い。天文学は、その意味でアマチュアが活躍できる学問分野の代表である。一方、文科系では考古学がその代表であろう。

しかしながら、プロとアマチュアとの関係においては、客観的に見て、天文学の方が良好であった。日本天文学会は、設立当時から一般会員と称するアマチュアの占める位置を確立していたし、天体発見者への表彰を長年にわたって行ってきた。一方、考古学では、何冊かの本をひもといってみても、それが非常に不幸な状態にあったことは明白である。あえて批判を承知でいわせてもらえば、分野に特有の閉鎖性が両者の関係を引き裂いてきたといえるだろう。かつてアマチュアであった直良信夫氏の明石原人発見を、アマチュアである(すなわち学会に属していない)という理由で、よってたかって潰してしまうという過ちを犯した(たとえば[1])。これは松本清張の「石の骨」という小説にもなっている。また、納豆売りをしながら地道に先人の足跡を追い続け、岩宿遺跡において、ついに縄文土器に先んじる石器を発見し、旧石器という新時代を拓いたアマチュアの相沢忠洋も、彼個人が評価されたのは後年になってからである(例えば、[2])。プロとの諍いやしがらみは現在まで尾を引き、いまでも彼の業績を称え

¹ 国立天文台

る群馬県笠懸町にある記念館は、官立の「岩宿文化資料館」と相沢家が営む民営の「相沢忠洋記念館」とが並立して存在している。その上、当の最初に発見された記念すべき石器は後者に展示されており、前者にはレプリカしかおかれていない。

これらの不幸な関係に終止符を打ち、両者の関係を良好にするよう、考古学分野でも努力が払われた。だが、それが行きすぎた感がある。アマチュアの成果を議論することなく、黙認し続けた。そして、アマチュアを批判することをタブー視するあまり、当然あってしかるべき、正当な検証と議論をないがしろにした。これが学会として、学問に関する責任の放棄であるといえる。

ここに倫理観の欠如したアマチュアが活躍する隙があった。とにかくニュースになり、報道されれば、当人が満足するだけでなく、次の計画もたてやすくなる。特に発掘作業では資金難が常に問題となり、後ろ盾のないアマチュアは、「常に脚光を浴びていないと行政からの支援が得られない」(2000年11月10日朝日新聞、(財)東北旧石器文化研究所・鎌田理事長談)。一方、プロ側は、おかしいとは思いつつも黙認を続けた。なぜなら、学問全体に対する社会の視線が集まり、社会的評価も高まり、ひいては同じ分野の研究費も得やすくなっていったからである。ろくな検証もせず、「彼を馬にして、みんながむちをふるい」(2000年11月7日朝日新聞、國學院大学教授・小林達雄氏)、考古学会全体が「氏のもたらす日本最古の甘い蜜をさんざん一緒にすってきた」のである(2000年11月9日朝日新聞・宮代栄一記者)。ある意味で考古学のプロたちは彼らを最大限、利用する立場に立った。その結果、何十年にもわたり、ねつ造が繰り返されるばかりでなく、やがて教科書が書き変わり、そして各地で地域起こしさえ始まった。

もともとが閉鎖的な風潮を持つ学会であったことも災いした。第三者による客観的検証を嫌い、いわゆるディベート(議論)を避けて、もともと日本社会に

ある「和」を重んじる文化土壌が、学会のような少数的閉鎖空間でも波風を立てず、という悪しき風潮を導いているように見受けられる。「偉い先生がXXと付けた概念を踏襲する(2000年11月10日朝日新聞、共立女子大学講師・竹岡俊樹氏記事)」ようなことがまかり通るようであれば、そのような学会は学問に対する責任を果たしているとは言えない。とりわけ、学問論争が起きたとき、同じデータをを用いた検証が必要なのに、「論文を発表してから出土した化石を見せてもらえない(2000年11月10日朝日新聞、竹岡俊樹氏記事)」ようでは、知の最前線に立つ学会としての資格はないだろう。

考古学のみならず、知の最前線に立つものとして、われわれはいくつかの教訓を学ばざるを得なかった。学問の発展や発見が「社会的に大きな影響を持つ現代」であるからこそ、学者ギルドの封建的社会の中だけに閉じることなく、様々な意味での社会に開かれた学会と研究資料の情報公開が必要であること。そして、感情的なしこりを気にせずに学問的な議論をすべきこと、またそれが社会から求められていることである。

3. お墨付きを欲しがらる社会

さて、話は20年前にさかのぼる。筆者が当時の東京大学東京天文台に勤務してしばらく、筆者の研究室のボスのもとに静岡県のゴルフ場の関係者が現れた。新しいゴルフ場開発に絡み、お願いがあるというのである。話を聞いてみると、新しいゴルフ場はナイター設備を作るらしい。そのナイター設備ができれば、当然、強力な屋外照明を設置するから、稼働中はその光が上空に漏れだし、夜空を明るく照らし出す。そのために昔から近くにある民間の天文台が文句を言っているというのである。業者の要求は「天文台として、ナイター設備の照明は天体観測には影響がない、と言って欲しい」というのである。

これには驚くというか、あきれ果てた。天文台は、

そういった光害を率先して防止を呼びかけてきた研究組織でもある。近隣に対してもなるべく夜間の照明をしないように、する場合でも照明の指向性を下に向け、上方への漏れを少なくすることなどをお願いしてきたところだ。東京天文台のそばに競技場ができるときにも、台長名のお願い状を都知事に出したほどである。そんな光害防止の総本山にやってきて、光害が何の影響もないことを説得する「お墨付き」をもらおうというのである。まだバブル全盛の頃だから営業の見込みもあったのだろうが、そのような趣旨に添うようなことはできないことを説明し、帰っていただいた。持参したお菓子を丁寧に持ち帰っていただいたことはいうまでもない。

さて、私は現在、国立天文台広報普及室というところに籍を置いている。いわば国立天文台の対外的な窓口である。この窓口には、実に様々な問い合わせやお願い、それに苦情がよせられる。中には、前述のようなお墨付きを望むと思われるものもある。政治がらみの要請も希にはあるがやってくる。数年前であるが、ある議員の先生が「XX村から見る沈む夕日は日本一美しいので、これを認めよ」などという笑止千万のものもあった。事情を聞けば村起こしに困った地元の要望を受けて、頼み込んできたものらしいので、事情はわからなくもない。だが、国立天文台では日出・日の入りといった時刻の計算は行えるので、元旦の日の出はどこが最も早いのか、という問いには答えられるが、このようにどこが美しいか、という主観が入るような評価はできるはずもない。やんわりとお断りするのに実に苦労したのである。

昔はいわゆる御用学者というのがいた。権威は持っているが、倫理観を全く持ち合わせておらず、資金提供があれば、会社や国のいうことに最先端知識人としてお墨付きを与える学者のことを言う。実際、公害問題が始まった頃は、明らかに会社と結びついた学者や、国の方針をでたらめな統計処理をしたデータを示しつつ、無害であると主張してき

た学者がいたことは事実である。幸い、わが研究室や現在の広報普及室は、知の最前線の立場を確固とした倫理観の上に貫き、行動したことだけは間違いない。

4. 日本惑星科学会における問題

本論文を書く契機になった問い合わせがあったのは、今年のはじめ頃であった。地元の方らしく、言葉は非常に柔らかかったが、その趣旨は明快であった。「高松市の南方のクレーターが正式に衝突クレーターであるとアメリカで承認されたので、国立天文台としても承認すべき」という要請である。もちろん、国立天文台は天文学の研究所であり、天体の発見ならまだしも、われわれの研究領域ではなく惑星科学である、と「逃げた」。(もちろん、この時、私が日本惑星科学会のメンバーであること明かすことはなかった。)

国立天文台としてはあくまで管轄外であるとして責任を負うことはないだろう。だが、本件に関しては、学会としての日本惑星科学会は、その社会的、道義的責任は負わねばならない。そして、このクレーターが地元では衝突起源と認知されつつあり、次第に注目されていること、村おこしや地域活性化の目玉に成りつつあることを極めて重い事実として認識すべきである。それは県議会の議事録、あるいはクレーターの湯などの諸施設への投資がはじまっていることから明らかであろう。クレーターの湯きらの解説文には「高松クレーターとは、高松市仏生山町の仏生山公園付近を中心点とする直径四キロ、深さ二キロほどのおわん型のくぼみのことで、今から約1500年前(原文のまま)に遙か宇宙からの隕石が衝突してできた巨大なクレーターである」と明言されている[3]。

筆者は、このクレーターが衝突起源か火山起源か、判断できる見識を持ちあわせてはいない。したがって、その真偽のほどはわからない。だが、このク

レーターが衝突起源説であると主張しているのが本会会員の研究者である。かたや、その説を批判する、あるいは懐疑的な意見を持つ研究者がいることも知っている。その中には本会会員もいる。問題は、多くの研究者がいくらかの疑義を持ちつつ、検証や批判をせずに放っておく状態にあることである。確かに、研究者個人レベルではいろいろないいわけができるだろう。例えば「そんなことに時間を費やしてられない」「すこし専門が違う」という理由で寡黙に徹している人もあろう。あるいはもっと正直に、そんなことで「敢えて波風を立てたくない」という日本人独特の和を尊ぶ精神があるのかも知れない。だが、先に見てきたように、社会から批判されているのは、そのような学会の「検証・議論の欠如」ではなかっただろうか。考古学の学会である考古学協会を批判することは、われわれはできない。その意味の重さを、いま学会員全員が自覚すべきである。日本惑星科学会の中では議論も検証もする道具立てや適する人材がいませんでした、そのために判断もできませんでした、という言い訳は社会には通用しないだろう。

5. 日本惑星科学会は何をすべきか？

もちろん、私は個人的に、上に述べた件と「石器ねつ造事件」は質的に異なると考えている。高松クレーターはいわばある学説に対する放任であり、石器ねつ造事件は悪意に基づく発見事実の放任である。だが、社会の側からの視点に立って欲しい。どちらも町や村を動かしていることに変わりはない。旧石器の場合は、秩父原人などをブランドとして多額の官民間わなない投資が行われた。高松クレーターの場合も、同様に多額の投資が行われてしまいかねない。もし、このまま明確な学術論争もなしに(あったのかもしれないが、社会がわかる形でなされていないままで)、日本惑星科学会が黙認を続けてしまえば、自治体はその学説を全面的に信用した投資を

行うであろう。そして、村おこしをする側の自治体にとってみると、後々それが間違いであることが判明した時のショックから生じる学会に対する不信感、そのおおもとが、ねつ造であろうが、学説論争であろうが、それほど変わらない。社会からの批判も同じである。

「考古学協会は、旧石器の発見をなぜ放任し、疑義を持つ学者が居たのにそれを議論・検証しなかったのか。」

「日本惑星科学会は、衝突クレーター説をなぜ放任し、疑義を持つ学者が居たのにそれを議論・検証しなかったのか。」

ここで改めて言うておくと、私は別に衝突クレーター説を唱える研究者を批判しているわけではない。その学説に対して、「批判・検証ができるであろう研究者が、影でそれを批判しているだけで、表向きには黙っている状態」を問題にしているのである。何も言わないのは黙認であり、もしその学説が間違っていたとすれば、疑義を持つ判断ができる研究者が寡黙を貫くのは罪である。

この学説は論文になってないから議論せずに来たのだ、というようないいわけは社会には通用しない。論文になった段階で、相互に議論をするというのは研究者ギルド社会だけの論理である。すでに学説が論文を飛び越えて社会に影響を持っている以上、論文とは異なる手法で扱わなければいけない。問題が起こった後で、社会的責任を学会が問われたとき、われわれがしっかりとした議論・検証という学問研究のコミュニティとしての義務を果たしてきたといえるようにしなくてはならないのである。

筆者は、日本惑星科学会は、こういった社会的に影響が出始めている学説(決して高松クレーター問題だけではない)を取り上げ、それを積極的に検証する議論を、組織として行う姿勢を見せるべきであると主張したい。その手法としては、いろいろな方法があると思うが、会員の方々の積極的な意識改革がまず必要である。

いずれにしても隣接分野の研究者の好奇心として、本当はどこまでわかっているのかを明らかにしてもらいたいという気持ちもある。もし、検証・議論を進めていく過程で、衝突クレーター説が正しいことがわかってくるなら、こんなに嬉しいことはないだろうし、逆に学会全体で高松周辺の町々に宣伝して歩き、県知事を動かして県立大学付属のクレーター研究所などというも設立できるかもしれない。もともと天文学分野での町立や村営天文台などは、そのような経緯でできつつあるのである。

だが、逆のケースも考えておく必要がある。聞くところでは、考古学協会だけでなく、藤村氏が関わった各地の遺跡がある自治体で、独自の調査が行われつつある。そして、相当数に上る発見がねつ造であることが判明しつつある。そして、ついにねつ造に基づく地域興しへの投資に関しての損害賠償の検討がはじまっている。被害額は、そのまま賠償問題にはねかえる。その時になって、あの学説は間違いでした、というのでは遅い。日本惑星科学会そのものへの損害賠償が降りかかることは、法的にはありえないと思うが、少なくとも考古学と同様、大きな汚点となってしまいかねない。いずれにしろ何か問題が起こってから対処するのでは遅い。その前に、いまのうちに、学会としての社会的責任を果たすべく、社会へ大きなインパクトを与えるような学説に対して、各方面からの慎重な議論・批判をする場を何らかの方法で設けるべきである。統一見解ができるとは思えないが、少なくとも議論検証をする姿勢を示すことで、行きすぎた社会全体の偏見を是正することはできるだろう。

6. 報道人への警鐘

もうひとつ、筆者はねつ造を続けた旧石器発見や、この種の大きな影響を持つ学説について、それを扱う報道側の姿勢を厳しく問いたい。記者やジャーナリストが、考古学に限らず新発見等の大きなニュー

スをより早く社会に伝えたい、という気持ちは理解できないわけではない。しかし、新たな発見や新しい学説に対する評価は、学会内部での検証・議論・査読があって固まっていくものである。これらのプロセスを無視し、いち早く発見や新規な学説だけを大きく取り上げ、なかば歴史的事実に祭り上げてしまった責任の一端は、報道にもある。これは警察発表を鵜呑みにして、犯人像を社会的に定着させてしまった松本サリン事件における報道姿勢と本質的に何ら変わるところがない。大きな発見であればこそ、各方面からの批判的な観点を含めた様々な意見を併記すべきであろう。

また、科学ジャーナリズムに関しては貧困な日本の現状がそうさせるのかもしれないが、学会発表などだけをもって、大きく取り上げてしまうのも問題であろう。新しさという意味では学会発表は最も早い。それに引き続く論文発表などのプロセスをまったく追跡しない場合が多い。そして、こういったニュースネタとなった発表そのものが論文審査を落ち続け、印刷物になるまでに時間がかかることもまれではない。そこでは論文誌に伴う厳しい研究者間のギルド内における良心や倫理観の発現でもある審査制度を十分に利用していない。こういった追跡不足、認識不足が科学報道をかなり歪ませている一因である。

その意味では新聞やメディアが、有る発見や学説について多様な見方を十二分に知らせているか、どうか厳しく問われているといえるだろう。この点については、地元の新聞が先行気味であるのは否めない。ただ、その中でも例えば1999年の高松クレーター隕石説を取り上げた四国新聞(3月29日)は、見出しこそ「いん石説立証する粒子発見一衝突は1530万年前一ニッケルの状態が決め手」とセンサーショナルだが、記事中には隕石衝突説に懐疑的な二人の研究者のコメントを「判断早いのでは」「細かな検討必要」という見出しで紹介している。これらが署名記事であり、ジャーナリズムの規範的な記事構成になっていることは不幸中の幸いであろう。

7. 独立法人化の嵐の中で

もともと惑星科学という学問は、どちらかといえば純粋科学あるいは基礎科学の色彩が比較的濃い。そのため、惑星科学を中心とした学術団体である日本惑星科学会では、学問をどう進めていくか、あるいは組織改革に伴う学術研究のあり方についての議論やアピール(例えば、宇宙三機関の統合問題に関するアピール)などという視点での議論は行われてきたが、社会的責務とか倫理といった事柄は、ほとんど問題となつてこなかった気がする。これはまた、学問分野が境界領域として生まれてきたことや、誕生後間もない、といういくつかの事情もあると思われる。だが、いったん学術団体として社会に認知され、活躍し始めている以上、何か問題が起こった時は、これらの理由で手をこまねいていました、という弁明は成り立たない。

社会が大学・研究機関に対して厳しい目を向けつつある今日こそ、われわれは組織のみならず、学会としても、その社会的責務を常に意識しながら活動することが大切なのではないだろうか。学会の閉鎖性の存在と危機意識の欠如は考古学協会に限らず、知の最前線たる日本のほとんどの学会に共通している。独立行政法人化の嵐は、それを目前にした国立大学・研究機関だけでなく、学術そのものを推進するすべての知識人全員の自覚と猛省を促している氷山の一角だという気がするのは私だけであろうか。

謝辞

本論文については、高松クレーターの地元である香川出身の中澤清・東工大教授により、内容・表現両面について適切なお指導・ご指示をいただいたことを感謝します。

参考文献

- [1] 直良三樹子1999, 「見果てぬ夢「明石原人」」, 角川書店
- [2] 相沢忠洋1973, 「「岩宿」の発見」, 講談社
- [3] 高松クレーターの湯「きらら」ホームページ, <http://www.netwave.or.jp/~koki/bathdata/kirara.htm>